



よろい
甲を着た古墳人だより



かぶと
火砕流の中から姿をあらわした冑

古墳人だよりVol.7(平成25年11月)で、CTスキャン撮影を行ったことにより「甲を着た古墳人」の頭部の下に鉄製の冑があることがわかったことを報告しました。同時にCTスキャンの画像から、古墳人の頭骨と冑は密着した状態にあり、二つを切り離して、顔や冑の外面を観察することは非常に困難と考えられました。

その後、九州大学アジア埋蔵文化財研究センター・比較社会文化研究院に搬送し、田中良之先生らの研究チームによる慎重な調査を実施したところ、冑から頭骨を無事切り離すことができました。

冑は再び当事業団に搬送され、周囲の火砕流堆積物が取り除かれました。外面は全体がサビで覆われていましたが、小札をつなぎ合わせて作られた頬当、鋳もその姿を現わしました。



火砕流堆積物を取り除いた状態の衝角付冑

■姿をあらわした胄

ヘラや筆を使って少しずつ火砕流堆積物を取り除いていくと、鉄の板で形づくられた胄の鉢の部分や、頬当や鍔の小札が並ぶ様子、紐や繊維の付着していた痕跡などがサビとなって見つかりました。CTスキャンの画像そのままの衝角付胄が姿をあらわしました。



慎重に火砕流堆積物を取り除く作業

■「衝角付胄」とは

衝角付胄は、正面が軍艦の舳先（衝角）に似て、尖った形をしているところから名づけられたものです。古墳時代中期から飛鳥時代以降まで、形を変えながら作り続けられました。小札の頬当や鍔は、古墳時代後期以降、衝角付胄の付属具として普及していきました。



上から見た衝角付胄

■井出二子山古墳と同じ形の胄

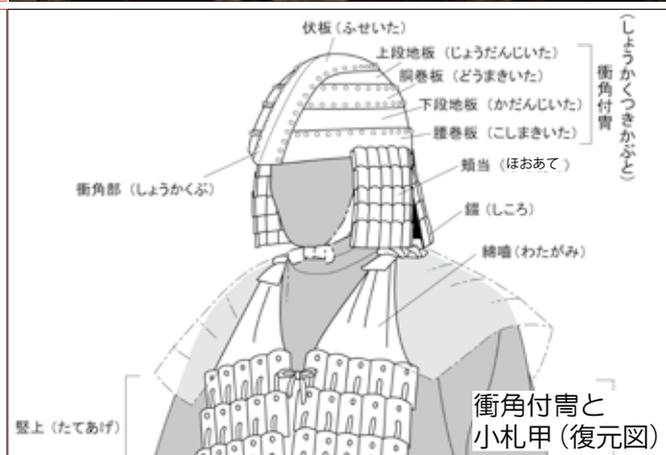
「甲を着た古墳人」が持っていた衝角付胄は、高崎市にある墳丘長 108 m の前方後円墳、井出二子山古墳から発見された胄と同じ形をしています。頬当や鍔が小札をつなぎ合わせて作られていることも同じです。「甲を着た古墳人」も前方後円墳やそれに準じる有力古墳を造るような階層の人だったのかもしれませんが。



空から見た井出二子山古墳（高崎市教育委員会提供）

■「甲を着た古墳人」と胄

「甲を着た古墳人」が持っていた胄や小札甲は、当時の最先端技術で作られた貴重品でした。どこで作られたのかはまだはっきりしませんが、近畿地方の中枢部、大和政権と係わりのある工房で作られ、政治的な結びつきの証として、各地の有力者層にもたらされたとするのが考え方のひとつです。



衝角付胄と小札甲（復元図）